

## 知的財産翻訳ジャーナル

NIPTA

2011年12月号

NPO日本知的財産翻訳協会機関誌

## ビジネスの裏方：翻訳業を生業として

特許についての見識はあまりないので、私自身の紹介になってしまいますが、敢えて人生遍歴の一端を書かせていただきます。

卒業後、大手電機メーカーに就職し、海外広報担当として様々なドキュメントの作成や夜は外人記者クラブを始めとして海外メディアの記者と会うことが多く、朝8時に会社着、帰宅は翌日という生活を送っていました。10年をめでに退職してみると自分のアイデンティティがいかにか会社にあったのか、と実感した次第です。5年くらいは何をしていいかわからず放心状態だった記憶があります。

日テレの「今日の出来事」などの放送現場でのフリーランス翻訳を経て、1995年、山根ドキュメンテーションを会社として発足させました。翌1996年からコンピューター書籍の翻訳やDTP業務を開始して、これがローカライズやマルチメディアの分野に踏み込みきっかけとなりました。

翻訳という物差で言語をみてゆくうちに英語圏はアルファベットだけで動いているが、日本は漢字、カタカナ、ひらがながあり、これは何か根本的に違うなあと感じたのもこのころです。アメリカ人から漢字の「くがまえ」の中は半導体の回路のようだとと言われて、そうだろうなあと納得していました。

当時は杉並区の東高円寺で仕事を始めたのですが、6万のワンルームマンションに住んでいて、最初は手書きで翻訳していました。翻訳会社の営業が締め切り前には取りに来るときは布団類を隠してなんとかオフィスを装い、急かされながら納期に間に合わせるとい

NIPTA理事  
株式会社山根ドキュメンテーション  
代表取締役 山根 信成



う日々でした。いつも納期に追われて精神的な余裕はなかったのですが、

当時の翻訳者は「先生」と呼ばれておりまして、何か仕事に追われている売れっ子作家になったような気分ではありました。

しかし、終日家にいることは私にはストレスが溜まり、どうも苦痛になってきました。知り合いに営業的なアプローチをしてみると、そこそこ仕事が増えてゆき、会社組織にして自分は営業とコーディネートに特化することにしました。今では起業家という言葉もありますが、自分の食い扶持を稼ぐ為になんとか会社を作ったというのが本当のところ。分野とか関係なく仕事を受注してアルバイトの制作の人に投げかけていましたが、事務所の掃除から翻訳者さんの支払いまで総務、経理、営業、コーディネーター、品質管理含め数人でやっていたので工程の全体を見る目を養えたのは少しは当時のお陰かなと思っております。

2011年4月から弊社は17期目に入りました。今年は東北大震災もあり、世界経済も国内も混迷を極めておりますが、禅の言葉で「不安定の中に安定がある」というようです。つまり、どのような状況であろうとも「今」に入り込めば活路が見い出せると理解しております。

30歳台からの私事を徒然に書いてきました。巻頭言としてお恥ずかしい限りですが、足元をよく見ながら腹を据えて一歩ずつ社員と共に歩んでゆきたいと存じます。